春狐談

泉鏡花作

感應

感應といふのであらう。私が小兒の時不思議な事があつた。田舍に居て、父は博覽會に出品したものがあつた。見物傍〳〵東京に出て居た留守、晩方のことで、ちやうどあかりを點した時、四歳になる妹の、縁側に居たのが、何かいつて駈けた拍子に石の上へ落ちて、頭を切つた。颯と血がはじいたのを見て、母があツといつて思はず聲を立てなすつた。

すると三日措いて、東京の父から手紙が來て、上野の宿坊に一室借りて居る、一昨日晩景、座敷の障子越、縁側で、御身があつといふのを、形は見ないで聞いたが、別條はなきや、案じ暮すとの一通、おなじ月おなじ日おなじ時。

少し趣は異なるけれど、恐しく雷の嫌ひな人は、其日朝あたりから豫め晩に鳴るのが分るつて、多く

いふ處であるが、知己の者に、戀人から手紙の來るのを、つい一秒前に、今だなと、思つて悟ることが出來るのがある。何時かも庭へ朝顔を見に出ようとして、片足おろしたがフツと氣がついて、衝と玄關へ出ると、郵便、御存じより。紅葉先生の内の玄關に一人、夜中の郵便物を一纏めにして配達が受取函へ入れるのを、引出しながら暗がりで、手に觸る感覺で、多くの中から、其故里の親のおとづれを分けて取つて誤らないのがあつた。